

「オライオン飛行」

高樹のぶ子

懐中時計から飛び出す世界

阿部公彦



講談社 1600円+税

太平洋戦争前夜、美しい日本人女性とフランス人冒険家の間に生じた悲恋——そんな枠組からすでに想像されるように、『オライオン飛行』には思わず息を呑むような壮絶な肉体的苦痛や、きりきりと胸が痛む切ない思い、じわっと心に響く不幸な親縁関係などがたっぷり描かれる。ところがもしろいのは、読んだ実感として、この作品がまるで極上のマッサージュを受けているような穏やかできめの細かい心地を体験させてくれるということである。小説とはかくも気持のよいものだったかと思わせてくれる仕組みがそこにはあるようだ。

秘密の一つは小道具にある。語りの導き手となるのは現代を生きる里山あやめという二

れることになる。

この航空事故とあやめをつなぐのが、懐中時計なのである。戦前の航空事故と現代の穏やかな日常との間には、まるでパラレルワールドのような距離があるかと思える。しかし、『オライオン飛行』では、その巨大なギャップが、小さな時計の極小部品をじわじわと整え直していくようなやさしい手つきで、あれよあれよという間に埋められてしまう。実は、この作品の今一つの大きな特徴は、日本とフランス、戦前と現代といった異なる世界を、磊落と言っていいほどの柔軟さでつないでしまう語りの変幻自在さなのである。「まずこれから記すことは、こうした桐谷久美子の日記や書簡から、あやめが想像した悲恋だ。想像しただけでなく確信した悲恋だ。何しろ日記なのだから、確信するには十分である。これこそ厳然たる事実」とあったかと思うと、「しかしこの世に、厳然たる事実など存在するだろうか。この疑問は疑問のまま残しておくことにする」などと続く。残された資料から自在な想像力で物語をふくらませるあやめ。物語はそんなあやめの視線に寄り添うかと思ったりもする。そもそも杓子定規なリアリズムの規則などにはこだわらないのだ。むしろ語

十代の女性だが、彼女が日々いそむのはスフレづくり。そのふかふかの感触がこの作品の出発点にはある。そのスフレ的な甘い感触を引き継ぎつつも先へとつないでくれるのが時計。あやめはある日、年代ものの古い懐中時計を古い時計職人鉢嶺一良の店に持ちこむ。ここから物語がぐっと前に動き出す。時計を分解し検分する一良の視線と手つきには、スフレのふかふかさの背後にある文化、つまり、複雑で繊細なものをとらえるデリケートな感受性が見え隠れする。時計は蓋のつくりから凝っている。開けてみると、中からは持ち主の事情などを書き留める「ウォッチペーパー」。しかし、そこに並ぶのは時計職人には判読不能なフランス語と意味ありげな数字ば

かりだ。寒蓋の鶏の像も気になる。そこにはいったいどんな事情が秘められているのだろう。やがて作中では、より悍猛で恐ろしい運命の力が前景へと躍り出てくる。一九三六年、フランスの冒険飛行家アンドレ・ジャビーはパリー東京間を百時間以内に飛んだ者に三十万フランを出すという懸賞飛行に挑戦し、パリからダマスカス、カラチ、ハノイ、そして香港へと単独で飛んでくる。寝る間も惜しんで行程を急ぐジャビーは、さらに台風の迫り来る中、危険を冒して低空飛行で九州の山地へと近づく。しかし、ここでジャビーの運命は大きく狂う。風に煽られたジャビーのシムーン機は山腹に激突し大破。ジャビーは何と一命だけは取り留め、九大病院へと搬送さ

りは小さな逸脱や、タイミングの良い符合や、ときには横溢する性のエネルギーや情感をうっとり楽しむかのように、この世紀をまたぐミステリーを追う。本来なら、あやめも一良もまったく知らないはずの世界だが、まるで手に取るように二人はその世界を再構築していく。私たちの目の前にはこうして、アンドレ・ジャビーと、美しい日本人看護婦・桐谷久美子との物語が浮かび上がってくる。

それにしても久美子の抑えた情念がじわじわと立ち上ってくるあたりをしつかりと書き切ったあたりは、この作家ならではの手際と言ってもいいだろう。ふたりが裏山の窪地で行うにふけていたとき、ふとジャビーが顔をあげる。ニワトリが草をつついていっているのだ。

ジャビーはその視線に一瞬たじろぐ。久美子が「ニ・ワ・ト・リ」と対応する日本語を教えるとジャビーは苦い笑顔になるが、久美子はそれを「穴をこじ開ける強さで見えて記憶」する。そして「引き出しを開ければいつでも、その笑顔が取り出せるように、アンドレの顔面に貼り付いた何層もの早春の空気を、丁寧な一枚一枚剥がして、胸の一番底の、決して誰も手を出せないところに、丁寧に保存した。何という力だろう。おそろしいほどの情の力である。おそらくこの作品をどっしりと描

るがぬものとして完成させているのはこうした細部なのである。もはやこれは誰が語っているのかよくわからない、日記の一節とも、あやめの想像とも、あるいは一良のコメントとも無縁とは言い切れない、すべての参加者によって共有されたようなあいまいな想像の領域である。しかし、そんなあいまいな領域に迫真性を与えるのは、今の一節にあらわれたような言葉の精妙なメカニズムにほかならない。単に事実を伝えるという意味での精妙さではない。むしろ「事実」から離脱し、想像の織り物をデリケートに、しかし、あくまでやわらかく広げてしなやかに羽ばたかせるための精妙さである。

謎は尽きない。久美子の死。二人が残した子供フロランスの行方。物語は最後までサスペンスを保持しながら進むが、このサスペンスが決して野蠻でとげとげしいものにならないのは、おそらく全体を包むのが成熟した諦念と慈愛だからだろう。このロマンスが設定されているのは一九三〇年代。果たしてこれほど私たちを酔わせてくれる恋愛譚は現在形で可能なのだろうか。私たちは——あるいは現代の小説は——失われたものを慈しむ大人の視線でしか、こうした物語を受け取れないのかもしれない。